

前立腺ガンとの出会い

——「生きる」とは、罪深いこと——

森 一久

私は『広高とヒロシマ』への寄稿の末尾に「二度あることは三度あるというからには」と書いて、次の出来事への予感と期待を滲ませていた。「二度」とは、ヒロシマの爆心と阪神大震災の中心での経験であるが、どちらの場合も、この二つの未曾有の危険のど真ん中へ、自らの意思で出掛けて行って、大変な目にあいながらも結局生還したことを報告したのであった。今回ののは、一段落して一年余り経たいま、「あれが三度目だったのかしら？」と思い当たるような、鼻を摘まれたような一種奇妙な気持でいる。

プロローグ

六十歳を過ぎる頃から、通勤途中に目が回って倒れるなどの体調不順に見舞れたことが、色々と病院通いのあげく、高血圧とかコレステロールが高いなどと言われながらも、幸いにも脳や心臓には決定的な病状は残さないでいる。ところで、十年ほど前から春先に心労が重なった時に限って、一過性の下血（鮮血）がおきた。三年前の春京都の或る国際会合に顔を出すついでに、予て一度行ってみたいと思っていた和歌山県田辺に兄の三郎に誘われていた。同地近くには竜神村という横溝正史の小説に出てきそうな名の村落があり、そこには曼陀羅博物館というのがあると知っていたので、そこにも行ってみたいと思っていた。ところが京都へたつ前夜、例の、いつもよりやや多めの下血がおきてしまい、京都までは行ったものの、ついに田辺行きは諦めたていた。国際会合ではレセプションで、S教授が「私はガンになったが、睾丸をとって治療して元気になった。」と女性通訳を困らせる一幕もあった後、料亭で懇親会が開かれた。最近夜の会合はあまり出ないことにしている私が、しかも下血も治りきっていないのに何故この会に出席したのか、いまでもよく分からない。数十人が大広間でお定まりの挨拶という光景に、「はやく帰ればよかったのに」と後悔の念にかられながら、席を外す機会をさぐっていた。ふと左の方から「田辺、..」という言葉が聞こえたような気がして、見ると先隣に田ノ岡さん。「お久しぶり。明日田辺に行くはずだった」という私に「田辺に来るなら、この私に届け出てください。まかせて欲しい、私の郷里です」。「いずれ竜神村というのも行ってみたい」との私の言葉に、驚きの表情とともに「竜神村なら生まれ故郷、村の半分は田ノ岡という苗字です」と隣の席に移って来られた。「何故とりやめたの」、「いや、ちょっと下血したので自重して、なに大したことはないのですよ...」みなまで言わせてもらえず...「下血？そ

りゃあかん。うちへ来なさい」。(ああ そうだ、この方は国立がんセンターの先生だったと、思う間もなく)「東京へ帰ったら、紹介しますからすぐ来て下さい。」ということにあいなった。

こうなった以上とことん調べて貰おうと腹を決めて、国立がんセンター中央病院へ。事務所から車で10分と、便利もよいわいと気軽に参上したのはよかったが、なにしろ「この人にもしもの事があつたら、日本の原子力は大変、」という田ノ岡さん一流の念の入ったご紹介。それからというもの、放射線検査部での検査は徹底しており、上から下からの内視は勿論、長い小腸まで微妙な手法でくまなく検査してもらえた。十回ほどの通院であったが、担当して下さった石川部長は恰幅もよくおおらかな方で、何度も通っているうち親しくさせて頂き、色々配慮して頂けて、小生としてはあまりへこたれないで、通院することができた。平成5年6月、「大変負担をかけたが、当院として自信ある結論をだすには、これだけの検査が必要でした。結論は原因不明(!)です」ということになり、あっけなく釈放となった。その後は、ストレスをためないように、節制してここ三年は下血はしないでいる。

思い詰めるのも、ときに幸い

さて小生の老人性の症状としては、数年前からの排尿障害一勢い悪く、我慢の減退等々があったが、友人から折にふれて丹念に情報を仕込み、いずれ泌尿器科に行くのか、いやだなと、トイレを見たら早めに用を足すなど気をつけながらも、なるべく気にしないようにしていた。さて高血圧の方は、心因性で仕事をやめれば治ると分かっているものの、それもならず、近所の〇医院にかかっているが、この先生の白衣の前では血圧値は大幅に上昇、市役所の血圧計での測定結果を持参しては「これが本当の血圧」と陳情におよぶなど長い御付き合いをつづけている。軽い降圧剤を用心のためと処方されていて、(小生もともと対症薬一鎮痛・風邪薬・精神安定剤・睡眠薬など一は普通の人のお半分の量で十分効くので、自分のリスクで、こっそり半量にしており、それで血圧は安定してきた。但し根治的な薬、抗生物質・殺菌剤などをもらった時ははそんなはことしないが。)〇先生は怖い人だが細心に血液検査や心電図をとって全身状況を診守って下さっている。だが、どうもコレステロール値は(肉食を続けたりすると)すぐ上がる。総コレステロール値は多くて250-270程度だが、周知のようにもし善玉コレステロールが多ければ心配ないわけであるが、普通の健診ではこの「善玉」をあまり調べてくれない。

そこで、原産かかりつけのクリニックに出掛け、なんとか善玉の測定してもらおうと思い

立った。妻に「また病気をさがすの？」と揶揄されながらも・・・ここから、わが運命の大転換が始まるのである。

「善玉」を追いかけて、奈落を覗く

クリニックの受付。「コレステロールのHDLを計ってもらいたいのですが・・・」、「ええ医師の指定無しでは健保で扱えないのですが・・・」、「自己負担だといくら位かかるのですか?」、「一万円くらい・・・」思い込んで来ている私のこと、「ではそれでもお願い」と財布に手をかけたとき、気の毒と思ってくれたのか、「ああ、ちょうど今、担当の先生がおられるので、たのんでみられたら」と診察室に通された。

固い表情の若い先生。型通りの問診のあと「ところで最近大病は?」、「近年春先になると、下血がありまして、いろいろ（私の言葉、この部分に少々力点がついていたのが幸いしたか）検査してもらった結果、原因不明ということで・・・ストレス溜めないよう用心しているせいか、ここ二、三年はありません。」、「どこで調べてもらいました?」・・・よくぞ聞いて下さったものである!この質問がなかったら、話はコレステロールで終わっていた事であろう。そして、私はいまこの世にいないかもしれない!

「がんセンターで・・・」。先生（木場氏）の顔が一瞬ゆるむ。「私は先月まであそこにいましたよ。いまは横浜市大に戻っていますが・・・」何科で?と質問が追いかける。「放射線診断部の石川先生に」・・・「ええ驚きましたね。あの先生とはずっと一緒でしたよ。あの人、体も大きく頼もしかったでしょう。」「そのとおり。本当に徹底的によくしらべてくださいました。」

ここで雰囲気は一変。「森さんも七十才になられたんなら、ひとつ色々しらべますか」と血液検査の用紙をひろげられた。なんと優に百項目以上もあろうか。「コレステロールね、善玉HDL、はい調べましょう」と印をつけ、「ほかに何か心配は?」「はい。肝臓機能の方も徹底的に。いろんな薬を飲んでいますので」・・・「分かりました。それから・・・」・・・「PSAというのは・・・」・・・「よく知ってますね。小用の方が不自由ですか。」

PSAというのを知ったのは、三年前Aさんが「ちょっと一週間ほど入院してきます」とおいでになった時、その表情に私はかすかなハニカミを見て取った。「お互いに歳ですよね。どの辺の手術ですか」という私の問いに、Aさんがおなかの下の方を指さした時、私は思わず身を乗り出した。察しのいいAさん、「前立腺病には特異なぴったりの腫瘍マーカーがあるんです。PSAという、我々原子力関係者にはとても覚えやすい・・・」、「確

率論的安全評価・」、「そう。そのPSAの値が三か四くらいなら、前立腺の肥大くらいですが、七くらいになると、ガン化の可能性を疑い、手術などの処置をとるわけです。」

「お大事に」とわかれた。

というわけで色々お願いして一週間後、木場先生「コレステロールや肝臓は問題なさそうですが、ただPSAが・・・」あわてる私に「150ちかくもあります。早急に泌尿器科へ」と、更めて国立がんセンター中央病院の同科主任様あての紹介状を書いてもらった。

初体験の泌尿器科へ

忘れもしない平成8年9月24日、田ノ岡さんが「こういう時は、第一線のバリバリの先生にかぎります」と紹介して下さった、築地の中央病院泌尿器科の鳶巢賢一先生のもとに初診の患者として訪れた。後できくと、同氏は”超”の字がつく第一線の名医であり、文字通り門前雀羅の受付で待つこと一刻。周りをみると、なんと初診とおぼしき人はみな、心配顔の妻娘らしき人を同伴しておられ、独りで来ているのは私くらい。そうか「泌尿器は今生の一大事であったか、帰ったら妻に報告しなけりゃ」と（気を紛らわすため？）そんな事を思っているうち、「森さん、どうぞ」の呼び声で我に返る。

紹介状を一瞥して後、「五年はなんとか」（生きられるように、出来るでしょう）と言われ、検査室へ。泌尿器科とあれば当然下腹部の前の方を診られるものと風呂でよくよく洗ってきたのに、拍子抜け（その後何年通っても、診察や処置はすべて後門からであった）。血液や尿の検査の後、警棒の短いようなのを突っ込んで、エコー撮影。写真はすぐできて、「随分前立腺が大きい。白い点々は結石かも」（と言われたのは、まずガン細胞とは分かっていても、近くドイツ出張と告げていた小生の心中を慮ってのことだった、といま思うが）。「とにかく細胞検査（生検という）を。当院では入院してもらうことになっているので、予約とって下さい」と。十月二十三日から二泊三日の予約をとり、その心得などを係の人から親切に説明してもらい、先生から「この病気は（ガンでも）進行は遅いのです。じっくり行きましょう」という言葉に送られて帰宅する。

国立ガン・センター、よろず考

原爆のときも、その後のいろんな病気も、周囲に甘えて家で治療し、入院というものの経験が、私には無い。遠い旅に出るような気持ちで入院手続きを終え、廊下の椅子にすわって打合せも終わり、妻が帰りかけたとき、目の前を通りかかったのは、東工大名誉教授T氏らしき寝巻姿。「御入院ですか」、「ええ、検査で」。こういうのを、地獄で仏といった心地というのだろうか、院内の売店等々のよろずを教えてもらって、気分が明るくなっ

た。国立がんセンター中央病院は看護婦さんや係の人の心配りが大変よくて、不愉快な感じをうけたことはなく、「国立」というイメージは、(予算の関係か) 食事の頼り無さくらいのものであったが、やはり患者で知り合いがいるというのは、心強いものだ。翌朝移動ベッドの乗って(健康なひとでも無菌のためか) 処置室へ。ここはまるで、ハイテク工場といった感じで機械がずらり。腰椎麻酔や注射の間も「気分は？」親切に声をかけてくれる。鳶巣先生「こういう(細胞をうまくとるような) 処置は私より若い人の方がうまいのですが、どうしますか」、私「私のは、そんなに腕力いらないと思いますが」と先生自身にお願いし、「なるべくガンでない所を取って欲しいのですが・・・」。助手や看護婦の方々の笑い声。「笑わせないで。」とたしなめられ、目をつむる。この間も「大丈夫?」、
「気分は?」と声をかけてくださるが、なんともない。ピューンという空気銃のような音が数度、二三分で終わる。あと一日血尿の終わりをたしかめて退院。この間も先生や看護婦さんがベットに立ち寄ってくださって心強い。

検査入院の時も二週間毎の通院時も、田ノ岡さんはよく顔をみせてくださり、徹底した御案内ぶり、「あそこのコーヒーは安いはずい。あの看護婦さんはベテラン、とくに親切なのはこちらの人。やはり食事は外の魚河岸のが安くてうまい。・・・」といった調子。院内の案内のとき、地下一階の「これが放射線治療部」につづき「あちらが・・・」とちょっと言いよどまれるのを、小生「霊安室でしょう。」(そのとき内心、ここへ連れて来られそうになったら引き返さねば、と思ったのだから、いい気なものである。)

我なりに背水の構え

二週間後、生検の結果。「ばっちり(ガンが) 見つかりました。早速ホルモン療法と睾丸の・・・」。小生「それなら取ってください。もう用もありませんので」(と先刻聞き及んだS先生の体験から)「いや、一ヵ月一回の注射で睾丸の働きを抑える」、「入院も不要で?」。「それより早速ガン細胞の転移の有無を調べます。CTとRIシンチの検査予約を」となって、三階と四階を回って、申し込む。CTの方は「大至急」という指定があって、三日後に。シンチ(放射性のテクネシウム化合物の静脈注射で転移の有無と位置を突き止める)の方は2週間後に。

男性ホルモンの働きを抑える薬(プロススツール)の服用と月1回の注射(リュープリン・武田)が始まる。インフォームド・コンセント時代とあって、薬などの起こりうる副作用の事前説明は懇切を究める。このホルモンの場合、「長期に服用するが、肝臓や心臓をやられる人、お乳が大きくなったり痛くなったりするのもある」といった調子のご説明。

このホルモンは、幸い甥の森弘が役員をつとめる帝国臓器の製品、早速医家向けの説明書を取り寄せて精読する。「鬱血性心不全」、「血栓症」にはじまり16種もの副作用の記述がある。各項目の説明の頭に「まれに」とか「ときに」という語句があり、それぞれ「1000人に1人」、「20人ないし1000人に1人」の頻度を意味する事を知り、その「一人」にならなければいいのだ、と楽観的に自己暗示をかけることにした。食事後の散歩と肝臓の補助にもなる消化剤服用をはじめたが、散歩といっても毎食後20分程度の軽いものだが、それ以来2年以上、風雨雪も何かは、と一日も欠かさないのには、我ながら立派というより、いささかあきれている。 *今日ね*

前立腺ガンについて ここで、本病について若干解説を。前立腺は膀胱の出口に鎮座する小栗大の、男性の精子に栄養を供給する2個の臓器である。これにガンが発生したとき、睾丸で作られる男性の第2次性徴ホルモンを栄養にしてガンは増殖することが、1944年発見された(Hyggin博士、ノーベル賞)。このことは中国の昔の宦官にこの病気が無いことでも裏付けられる。この発見以降治療のため、この男性ホルモンを抑える薬や睾丸の除去ないし機能抑止が行われるようになった。もっとも、最近の研究では、このホルモンの作用機序はさほど単純ではなく、症状の展開によって、療法に種々の考慮が必要とされるようになった由である。

さて、「あと5年かも」と宣告された時、原爆以来50年生きてきたのが不思議な幸運といえる我が身、わが人生もそろそろ幕の引き時か、と極めて冷静に受け止めたつもりだった。上記のような病気や薬への対応も我ながら冷静であり、また身辺整理のため高槻の小居での定期的逗留をやめたのは、ガン・センターへの通院或いは入院の必要からの判断でありあった。もう再び関西に来られないかもしれないと思い、半ば「お別れ」の気持を込めて、兄三郎一家と世話になっている吉岡夫妻を午餐に招待したのも、いずれももきわめて周到な下準備のつもりだった。しかしながら、あの頃の私の心の底の動転ぶりは、本人の自覚と違い、かなり大きいものであったのである。その証拠に、平素なら考えられない大きな判断の誤りを侵し、一生忘れられない痛恨事をひき起こしてしまう。

愛犬を失うことに *ね*

全面的に藤沢に戻るとなると、愛犬ボンの輸送が問題だった。最近近所の神門(ごうど)さんになつき、可愛がってもらっていたので、週央の留守が二週にわたっても、食事や散歩を快く引き受けて下さっており、そのご好意に甘えるつもりなら、そんなに急いで連れてかえる必要もなかったかもしれない。2年前こちらに来る時は、長男に車で長距離輸

送してもらい、車酔いで氣息えんえんながら、ボンは高槻に辿り着いたのだが、当地は水が合ったのか14才の高齢とみえないほど元気に暮らしてきた。雑種だが、気立てやさしく清潔な犬で、それでいて見知らぬ人からの物は決して口にせず、また~~此~~その大きな紀州犬が闖入してきたときなど、噛みついて放さないという、まことに頼もしい愛犬だった。今度も、ボンにとっては苦難の車輸送もやむをえないかと思いつながらも、子供たちもなかなか時間がとれそうもないので、宅急便で引き受けてくれないかと問い合わせたりして、思案していた時、ふと親戚の者から「やはり飛行機輸送が最も犬に負担がかからず、費用もそれほどでないそうです」という情報がもたらされた。

もともとボンの最大の弱点は、雷に滅法弱いことで、遙か遠くの音でも、それを感じて怯え、狼狽して涎をたらしながら、家のなかに飛び込んできて、テーブルの下にもぐり込む始末だった。その事をよく知っている私が、飛行機の轟音や貨物室には防音が施されているかどうかといった事に何故頭が回らなかったのか。それに割りに縁起を気にする方で、新しいものを着たり、引っ越しなどの時、必ずと言っていいほど、菩提寺からもらった暦を見て悪い日を避けるようにしているのに、このときばかりは何故か、それを確かめもしなかった。それに、同じ飛行機に乗り羽田からいっしょにに帰ると言う方法にも、思い至らなかった。

平成8年12月22日朝、ボンは親戚の車で飛行場へむかう。その出発の光景は、私の脳裏に焼きついてはなれない。車に乗せられたボンは「もう自分は不用なの」というように私たちの方に視線に走らせている。神門さんは「今からでも、キャンセルできないの？」の涙声・・・。

かくして全日空で羽田空港に到着したボンは、完全な狂乱状態、貨物引渡口で迎えの人に引き渡されたのも束の間、その手を強く振り切って、首輪とロープを遺し、いずこへか走り去り、ついに戻らなかった。

症状が急速に改善

ここで、前立腺ガンを見つけてからの経緯を時間表に纏めておく。

年 月 日	事 項	備考
平成 8. 30,	新橋クリニックで採血（木場先生）	
9. 13.	採血の結果、PSAが154と、国立	

	がんセンター中央病院に紹介状もらう	
9. 24.	同病院泌尿器科で薦巢先生に初診	エコー検査等と生検 (と入院) 予約
10. 23-25	検査入院 (6個採取、血尿翌朝のみ)	PSA 13.5
11. 12.	検査結果は4個が3位のガンと ①プロステール2錠2回/日 ②リュープリン注 (3.75mg) 月 1回、を開始	25mg 睾丸の機能抑止
11. 14.	CT検査	
11. 26.	同結果、 <u>転移無い模様</u>	
12. 3	RIシンチ	放射性Tcを静脈注 射、3時間後に造影
12. 10.	同結果、 <u>転移なしと</u>	
12. 22.	(ボン、 <u>失踪す</u>)	
12. 24	PSA. 8.5に (12, 10の値)	
1997年		
1. 7.	PSA、1.7に	
2. 4.	PSA、0.6に	
3. 4.	PSA、0.2に	

この時点で、カルテに「T3M0N0」(進行度3のガン、骨・肝臓には0の意味?)と記載された。

この頃になると、排尿の不順などは解消していたが、PSAが急降下しても、とてもこのガンが治癒するかもしれないといった、楽観的な気持にはなれなかった。薦巢先生も慎重で、「PSAが減少一途というのは、いい傾向です」とか「肝臓機能に変化ないのはいい」とか言って下さっても、快方に向かっているといったことは、放射線治療が終わって一年近くして、PSAが最低値を何ヶ月も続けるまで口にされなかった。

それにしても、ボンの輸送をあと一月後に判断していたら、私ももう少しは冷静で、あんな浅慮で思いやり欠けた方法とはならなかったであろうと、本当に悔やまれる。

とにかく、原爆の時の体験も思いおこし、「生き続ける」ということは、かくも罪深いことかと更めて肝に銘じ、己の人生観に少なからぬ影響を受けてしまった。

米紙からのヒント

兄茂はヘラルド・トリビューンやニューヨーク・タイムズによく目を通して、私がこの病気になってからは、関連記事の切り抜きを次々に届けてくれた。米国では、いまや「前立腺ガンは男性の敵」の時代になっているようで、毎週のように一面に医学情報が載る。その中に、統計上「トマトがいい」というのが目立ってきたので、丹念に読み、特に国立ガン研や同健康研などの研究については、原論文を取り寄せて勉強した。結論敵にいうと、種々の形態のトマトの摂取量とガンの発生率との関係を統計的に分析した結果は、トマト・ソース 生のトマト トマト・ジュースの順に、ガン防衛の効果が大きい、というのが定説になりつつある。早速米国出張のH嬢に「スーパーでトマト・ソースと言って、1-2個買ってきて」と（理由は秘して）頼み、それを見本に探して、日本でも入手できる事を知った。

さらに直近の研究では、数千人の看護婦さんの協力で、トマトの有効成分の「リコピン」が生よりもソースの方が人体の脂肪分にまで吸収されやすいこと、それにトマトのこの成分は、血液中の過酸化脂肪を血管壁に着きにくくし、心筋梗塞の確率を小さくすることも分かってきたとのこと。それにこの博士は、研究報告の末尾に「この種の論文がでると、すぐ有効成分を純粋に抽出して健康食品剤として宣伝・発売される。しかし私はこれには賛成できない。私が突き止めた事は、状況証拠の間の相関を統計的に調べたのであって、有効成分（と思われる）物質だけが効いているという証拠はない。例えば、それに随伴している他の物質と一緒にあって、効果を発揮している・・・と色々なケースもありうるのである」と極めて謙虚なコメントをつけておられた。小生は平素放射線影響の（統計でリスクを調べる）疫学者の一部の傲慢さに飽き足りない気持ちを持っていたので、この説明は極めて新鮮に感じられ、「これは信頼できる」と思ったものである。

以前高血圧になった時、友人がすすめてくれる、ゴマ・ギャバ茶・オートミール等々を次々とためし、トマトは毎日事務所まで持参して食べていたが、あまり色々摂取して忙しくなりすぎてしまい、降下剤を飲み始めてからいつの間にか、トマトは止めていた。いまではそれを再開し、「トマト・ソース」は普通の店では売っていないので、M屋からダースで取り寄せている。この辺は、先生には報告していないが、何がしか役に立っていると、密かに思っている。

外科手術か放射線照射か

さて、薬と注射が効き目を示してきた97年4月、薦巢先生に根治療法として前立腺切除

でいくか放射線照射にするかの判断をしてもらう段階にきた。放射線治療の権威者として著名な国立京都病院長（当時）の阿部光幸先生には、前から親しくして頂いていて、この病気についても報告したりアドバイスを頂いてきたし、鷺巣さんが京大で阿部先生の教え子だった（これも小生の幸運の一つだったが）ので、色々直接の連絡もあったようである。どちらにするかにためらうわれているように見えたとき、「私は鷺巣先生にすべてお任せしています」と言ったりした。「ここまで（前立腺縮小）くれば、どちらでも行ける」という御判断で、結局「放射線照射治療」を受けることになった。

その少し前に、韓国から勲章授与の知らせが入った。あの国の心の友々が奔走しておられるとは聞いていたが、この勲章は「国民勲章・石榴章」という韓国人以外の受賞は最初という、誠に身に余る光栄だった。この知らせを受けたとき、私の頭をよぎったのは「人生の最後を飾るようにとの、神からの贈り物か」という感懐だった。苦勞をかけた妻に最後の機会になるかも知れないと思い、飛行機というものに乗ったことのない妻に2泊3日の同行を求め、4月22日韓国・太田での授賞式に列席、金泳三大統領から黄金色の美しい勲賞を受けてきた。

連休明けの5月8日から週5日、一回2Gy、30日間の照射が始まった。それまで、私の病気が深刻なものである事は、妻と秘書のN嬢にしか知らせてなかった。事務所もほとんど休まないですんでいたし、皆に動揺させてもと考え、小生なりの「背水の陣」のつもりで臨んだのであった。国立がんセンター中央病院は、わたしの事務所から車で10分なので、照射をして往復一時間以内で帰れる。社用車はほとんど使わず、「ちょっと人に会ってくる」などと言って、何食わぬ顔でタクシーを使い週五日を一日も欠かさず通い続けた。この間、下腹部にマジックで前立腺の位置にマル印を描かれ、「風呂で擦らぬよう」にしながら、放射線治療部の角奈美子女医さんに副作用の注意をもらいながら、「先生、お腹が放射線で黒くなったようですが」、「森さんは始めから腹黒いのでしょうか・・・」といった冗談も交えて、あまり深刻にならないよう心掛けたのであった。

終いの一週間の照射は、リニアックで放射線を前立腺に絞って当てるのだったが、そのころから事前に言われていた「副作用」らしき症状が現れてきた。放射線は分裂の活発な細胞を壊しやすいので、粘膜の強化に役立つビタミンB2、B6、ニコチン酸などを含む市販の栄養剤などを自主的に服用していたが、効いたかどうか。排便・排尿のコントロールがきかなくなり、通勤電車ではトイレのすぐそばに陣取るなど注意して、外ではなんとか粗相はしなかったものの、わが家のドアをあけたトタンに、我慢しきれずどっと出てしま

い家内につらい洗濯をさせてしまった事も度々だった。一番辛い思いをしたのは6月20日の原産の通常総会の日、一時間半に及ぶ議案説明の途中で便意を催したら大変と考え、前夜から食事をとらずに、何とか乗り切ったものである。

再び、放射線との奇妙な縁

PSA値は放射線照射を始めたころから、ついに最低値（測定可能な最低の0.1以下）に到達した。それまで続けていたホルモン剤服用とリュウプリン注射は、特に副作用のようなのは感じなかったし、規則的に受けてきた血液検査でも肝臓機能などに影響もでていなかった。しかし、一年近くの連続服用などで体への負担も溜まっているに違いない、再発等で再服用の際のこともあろうなどと考え、鳶巣先生に「ぼつぼつ薬と注射止めては、いけませんでしょうか」と恐れるおそる申し出た。その何日か後、「そう、薬やめましょう」といわれ、「薬・注射を中止」と赤ペンでカルテに大書して頂いたときは、さすが慎重居士で来た小生も、正直ホットしたことであった。

その後、放射線の後作用（排尿過敏などー例えば水道の栓をひねってジャーという音を聞いたトタン、突然出てしまう・・・）は半年あまり残った。しかし、PSAが0.1以下という状況は、今や一年半になるが、ずっと続いている。「中止」の半年後のこと、それまで「まだまだ」といった顔をしておられた鳶巣先生が「森さん、何とかなったようですね。放射線も中々ですね。」と言われ、「おめでとう」に近い表情を見せてくださった。前立腺の切除手術でも超一流といわれる先生に腕をふるって頂けなかったが、そうしても大過なく治癒に向かったに違いない。しかし、ワイン・グラスのコップ部分を膀胱、柄の部分尿管に例えれば、前立腺の単に肥大の場合とちがい、ガンのときは繋ぎ部分をそっくり環状に切除するわけで、接合部が落ちつくまで二、三ヶ月の入院が必要で、血尿などの後作用がおさまるに、人によるが、時間がかかるとのこと。放射線照射の場合も前述のような副作用が、放射線に強い（らしい）小生でも、仕事をずっと続けられたとはいえ、かなりだった。要するにケース・バイ・ケースで一長一短、先生が、手術か放射線かの選択に時間をかけられたのも、領けることである。

PSA値も落ちつき、やや見通しがついたような気分になった或るとき、阿部先生に「原爆の時と今回の事とをつくづく考えてみると、私は一体、放射線に強いから原爆のとき生き残れたのか、それとも原爆に会ったから放射線に強くなったのか、どちらでしょうか」と軽口をたたいたことがある。「それは両方でしょう」とかるくいなされたが、最近中程度の放射線（自然放射線の百倍位まで）によってガンなどに対する免疫が強まるという説

が有力になっている。とにかく、こと放射線に関しては、小生はやはり因果な存在らしい
と思う。

むすび

こうして前立腺ガンの経験を思い起こしてみると、この世が因縁で成り立っていることを
更めて痛感する。そしてここに名前を（都合でイニシャルにさせて頂いた方も）出させて
頂いた方々との御縁と、それに対する感謝の気持ちは筆舌に尽くし難いものがある。と同
時に、どうしても末尾に、「愛犬ボンに捧げる」と記すことをお許し頂きたい。

（おわり） 1999.1.17.